

た。日本代表として黒川教授が選ばれ、各国の状況をまとめてニューズレターで紹介することが決まった。このミーティングをきっかけにしてアジア地域の連携が深まっていくことを期待したい。今回は、2002年にオランダで開催の予定である。

会議の合間に、黒川教授の案内で伯国鬼木東洋医療専門学校の鬼木市次郎理事長（85歳）にお会いした。私財を投じて、サンパウロに学校を設立した鬼木理事

長の波乱の人生は、私達の胸を打った。設立の動機、ブラジルにおける障害者処遇の現状、日系日本人社会で生まれ、育った障害者の社会参加の状況、卒業生の活躍などを拝聴した。ここまで鬼木夫妻を駆り立てたものは何なのか、いまだに自問している。

（筑波大学心身障害学系 中田英雄）

日本発達心理学会第8回大会（大阪大学）

1997年3月27-29日まで、千里中央にある、大阪大学の真新しいコンベンションセンターと人間科学部を会場に第8回大会が開かれた。日本発達心理学会は、発足してから10年に満たない若い学会であり、ご存じのない方も多いと思われるので、本学会の紹介も兼ねて報告したい。

本学会は、発足後、まだ日は浅いが、会員は2000人を越えており、また、独自の「開かれた学会」という方針を持ち活動を行っている。

まず、発達心理学を研究したい人は誰でも会員になれる。入会に際して推薦者は不要で、学歴も、業績も必要なく、いわゆる学者だけでなく、研究的な姿勢で人々と接する保育者、教育者、臨床家、実務者も歓迎されている。おそらく、30%前後がそのような職種の方々であろう。また、30、40代の若手が多く、女性が会員の半数を超えているそうである。役員や編集委員にも女性が多い。

また、発達心理学という乳幼児を思い浮かべるかもしれないが、むしろ、「生涯発達心理学会」とでもいった方がいい。発表論文や投稿論文をみると、乳幼児から、児童、青年、成人、老人まで幅広い年齢層を対象としている。

そして、学会員の構成からもわかるように健全と障害といった区別なく、人間の発達の諸段階における様々な臨床的な問題を研究対象としてゆこうという方向を持っている。また、従来の発達心理学者のみでなく、障害児教育、リハビリテーション、霊長類研究、行動分析学に関連した人々の参加が多いのも特徴であろう。

年に一回の大会と年3号発刊の「発達心理学研究」の活動の他に、経常的に会員による様々な自主的な活動が行われているのも特徴である。

まず、会員が自発的に集まって組織した、8つの専

門分野別の分科会が、それぞれ独自の活動を繰り広げている。現在、比較認知発達分科会、道徳性・向社会性分科会、文化比較・国際比較分科会、老年発達研究会、発達臨床分科会、発達障害分科会、性格分科会、保育分科会がある。各分科会には、学会が年間3万円の活動補助金を支給している。筆者の関連している発達障害分科会は「障害から発達へ、そして発達から障害へ」というキャッチフレーズのもとに、年3-4回の例会に、夏の合宿、発達心理学会だけでなく他の学会でのシンポジウムの開催、分科会のニューズレターの発行と様々な活動を行っている。来年の春には、今までの活動をもとにした、発達障害分科会の編集による「発達の謎」という3巻シリーズがミネルヴァ書房から出版される予定である。最近では、院生や若手研究者による「ユースの会」という勉強会ができ、例会を持って研究交流している。

また、全国に6つの地区懇話会もでき、活動をしている。

年数回のニューズレターの他に、コンピュータ・ネットワークによる月2回の研究情報ニュースを発信し、各地の研究会や講演会、出版物などの情報をアップデートに交換できるようにしており、最近では、インターネットにホームページ (<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jsdp>) を開設した。

学会発足の経緯としては、1987年の夏に、東京で国際行動発達学会 (ISSBD) の大会があり、世界中から1000人をこえる人が集まったが、その時ボランティアとしてはたらいだ若い研究者たちが、日本の発達心理学者が研究を交流する場としての学会が欲しいと考え、それから3年余り熱心に準備して発足したものであり、初期から国際性を重視してきた。毎年夏には、海外から研究者を招き、10-20名程度の少人数による1週間のワークショップを行い、若手研究者にトレー

ニングの場を提供している。

機関誌「発達心理学研究」は、従来の「仮説検証」型の研究にとらわれない、「仮説探索型(仮説そのものを探し出そうとする、きれいな結果が必ずしも出なくてもかまわない研究)」の論文も積極的に採用しようとしている。そのため、単一事例研究やフィールド研究も多い。また、編集委員が比較的若く、審査が丁寧であることで有名で、できるだけ採択にもってゆけるような教育的な審査が本誌の特徴である。時として、投稿論文よりも長い審査結果が戻ってきて、コメントを読むだけで大変に勉強になることがあり、お得である。

さて、今回の大会についてであるが、個人発表は全てポスター形式で300を越える発表がテーマ別に行われ、いくつかのポスターの前に人だかりができ、大阪大学の広い体育館が溢れるほどの人々でごった返した。会員が自発的に提案する8つのミニ・シンポジウムや、司会や話題提供者を特定せずに参加者が自由に議論する16のラウンドテーブル(テーマ懇談会)が行われた。発達障害分科会は「文脈の認知と障害」という自主シンポジウムを行い、自閉症児だけでなく、学習障害児でも近年問題になっている他者の意図や気持ちの読みとりの知識である「心の理論」や文脈認知の障害について、3名の若手研究者(内藤美加;上越教育大学、小野里美帆;筑波大学、嶋崎まゆみ;関西学院大学)と、京都大学の子安増生氏の指定討論によって行われ、100名近い参加者を交えて活発な議論が行われた。印象的だったのは、指定討論者を除いて司会者、話題提供者が全員女性であったことである。本学会における女性の活躍を象徴しているかのようであった。

最も多くの人に関心を引いたのは講演討論会1「発達そのもの一意図をシステムから分離しない方法」

で300人以上の参加者があったようである。佐々木正人氏(東京大学)は、生体のシステムの外にある、たとえば「～理論」に説明を依存するのではなく、発達の多様性をそのものとして記述してゆかなくてはならない、という基調講演の後、無藤隆氏(お茶の水女子大学)が幼稚園での1年間の行動観察をふまえた指定討論があった。最後に司会者の石黒広昭(宮城教育大学)が、「文化的な意味というものをどのように考えるのか」といった趣旨の質問に対して、佐々木氏が「意味って何ですか」と問い返し、会場が一瞬静まり返った。今まで当たり前と考えてきたパラダイム自体が大きく変わろうとしている、これもまた象徴であろうか。このように、道頓堀の流れに映し出された巨大な極彩色のネオンが溶けあつたような、迫力とカオスを示した大阪での学会であった。

このように、若い、会員の手作りによる活気ある学会であり、前述したように多くの障害児教育関係者、リハビリテーション関係者が活動している。生涯発達というスパンで見るときに誰もが障害を抱え、リハビリテーションの機会ももつことを考えると、今後も発達心理学におけるこれらの領域の重要性は増すであろう。いや、むしろ、「障害を内包させた発達心理学」というものを構築してゆかなくてはならないと筆者は考えているのだが、障害、リハビリテーション関係者の多くの参加を期待したい。

日本発達心理学会事務局

〒182 東京都調布市緑ヶ丘1-25 白百合女子大学内
TEL/FAX 03-3326-9417

RGB02662@niftyserve.or.jp

(筑波大学心身障害学系 長崎 勤)